

< 目次 >

1. 事務局より
2. 前年度編集責任者より
3. 新編集委員より
4. 本年度編集責任者より
5. 運営・企画担当より
6. 例会予定
7. 談話会予定
8. 研究促進プログラム
9. 各地の研究会だより
10. 海外情報
11. メーリングリスト frenchling からのお知らせ
12. 2015年度収支決算報告
13. 編集後記

1. 事務局より

事務局が早稲田大学文学学術院に置かれてから2年目となります。所属の異なる2人の事務局員で仕事をお引き受けすることに多少の戸惑いもありましたが、前事務局の協力も得ながら業務も一回りし、軌道に乗ってきたところです。今後、同様の分業体制で事務局を引き継いでいくこともあると思いますので、savoir-faireを積み重ね、また次の世代へとお渡しできるよう準備しつつ、業務にあたりたいと考えています。

2016年度もよろしくお願い致します。

連絡先

〒162-8644 東京都新宿区戸山1-24-1
早稲田大学文学学術院 酒井智宏研究室内
日本フランス語学会事務局
belf-bureau@list.waseda.jp

以下、連絡事項となります。

◆例会発表

毎年4月～6月、9月～12月に開催している例会ですが、新年度が始まった段階では「題目未定」「タイトル」(仮題)というアナウンスが以前より増えてきているように見受けられます。これに関し、ホームページの見栄えが悪いだけでなく、白水社『ふらんす』に掲載している例会案内に関して、編集部からも(非公式ではありますが)「学会員以外も参加可能なもの

として例会を宣伝するならば、もう少し効果的な案内をした方がいいのではないか」という依頼(お叱り?)がきております。発表を希望される時、学会全体の活動として対外的に発信されることにお気をつけください。

◆投稿規程の変更

今まで『フランス語学研究』への投稿は11月末日までに原稿を事務局宛に郵送することになっていましたが、第51号から事務局へメールで投稿するように変更されました。今後、郵送や編集委員による持ち込みは受けつけられませんので、ご注意ください。詳細につきましては、投稿を希望される方は第50号に記載されている投稿規程をご参照ください。

◆機関誌バックナンバーのアーカイブ化について

現在、『フランス語学研究』第45号までがCiNii(国立情報学研究所の論文情報ナビゲータ)において公開されておりますが、CiNiiのサービス停止に伴い、本年度中にJ-STAGE(科学技術振興機構が提供する科学技術情報発信・流通総合システム)へと移行する予定です。移行完了の時期についてはまだ明確になっておらず、移行過程においては一部バックナンバーが利用不可能になるなど、ご迷惑をおかけする事態も考えられます。会員の皆様にはご不便をおかけするかもしれませんが、ご理解頂けますよう、よろしくお願い致します。(守田貴弘)

2. 前年度編集責任者より

このニューズレターをみなさんがおよみになるころには、おてもとに、BELF 50号がとどいているころです。昨年度のこのニューズレター上で「日本のフランス語研究専門誌として、その記念碑的な1冊となる」よう努力させていただくと宣言したわけですが、秀逸な投稿論文をはじめとするさまざまな寄稿をいただいたおかげで、しっかりと内容のつまった号になったのではないかとおもいます。その実現には、目次におなまえのでている執筆者のかたがたはもとより、それぞれの投稿の査読にあたった編集委員のかたがたの多大なご協力があります。編集責任者としてこのばをかりて、こころよりお礼もうしあげます。

昨年度1年間のあいだに、編集委員会ではさまざまなことについての議論がおこなわれました。そのうち、

今後の編集の運営にかかわる重要な変更点について2点お知らせします。

1. 投稿規程の変更：投稿の方法がメールへのファイル添付によるものになりました（詳細については、本ニューズレターの「事務局より」の記事内、さらにBELF 50号の「投稿規程」そのものをご参照ください。
2. リプライシート：BELF次号からは、掲載可となった論文について、査読コメントに対するリプライシートの提出が義務づけられるようになります。BELF投稿論文の査読は、複数の委員により、ときには数ページにわたる査読コメントがつけられることがありますが、その後執筆者がそのコメントにどのように対応したのかについてのやりとりがないまま最終稿提出というのがこれまでのやりかたでしたが、これをあらためようというものです。

編集責任者業務をひきうけて、昨年度は、自身の出張などかさならないかぎり、毎月東京にかよって、例会発表にみみをかたむけ、当然ながらBELF 50号に寄稿されたすべての文書を熟読しました。通常の大業務と研究活動にくわえて、このような業務をこなすことは容易ではありませんでしたが、おかげさまで、さまざまなことをまなぶことができました。学会誌とは、一線の研究者がしのぎをけずるばであると同時に、わかって研究者をそだてるばしょでもあること、編集委員会と投稿者の、査読を通じたコミュニケーションによって、論文の内容がどれだけ改善されるものであるかということ、そして、執筆者自身をふくむ複数の確認者によっておこなわれる校閲作業が、それでもどれだけミスひろいきれないかということ、などです。

われわれ人文系の研究者は、共同研究などをするのもすくなくですから、研究とはひとりでするものだとおもいがちですが、視点をかえると、このように研究者間の直接・間接の協力関係がとても重要であることをまなぶことができました。だからもういちどやりたい、とみえをきる勇氣はありませんが、研究者のみなさんに、いちどは経験していただきたいとおもいます。
(大久保朝憲)

3. 新編集委員より

◆小熊和郎（西南学院大学）

1952年生まれの私が初めて編集委員になったのは、フランス語学会で新旧の大幅交代があった1985年、4年間（1979-1983）フランスでの劇的な formation（@Paris VII / Jussieu）から戻った翌々年のことで

した。以来20年以上（数年間2度お休みをもらいました）、編集委員としてフランス語学会での研究活動に間近に立ち会い刺激を受けてきました。正確にはつかず離れずと言うべきでしょう。年配の方から若い方々まで、類似研究テーマの方から遠くに眺めていた方々まで、編集委員会の枠組みの中で有形無形のおつきあいさせてもらったことは、人間的に狭い私のあり方を見直す上でたいへん貴重な経験だったと今では思っています。『フランス語学研究』が査読制になり（1986～）、「日本フランス語学研究会」から「日本フランス語学会」に昇格し（1990～）、雑誌の投稿項目も少し変わり、学会運営の仕方が分業制になり、アウトスピンの研究会が生成、消滅するということもありました。若い頃にフランス流の議論をすることが研究上いかに重要かということを知りましたが、今の若い人たちの態度はちょっと違うようにも感じています。個人や組織の有為転変を感得するのに30年という年月は充分でしょう。還暦も過ぎ、2012年には最終的に編集委員を辞退したつもりだったのですが、今回また新たにお誘いを頂き何かのご縁かと不思議な気持ちで、あと数年だけピンチヒッターをお引き受けした次第です。どうぞよろしく。

4. 本年度編集責任者より

このたび、編集責任を務めることになりました。しかし、最近あまりフランス語学の研究をしていません。そこで、研究活動の近況報告で挨拶に代えさせていただきます。

主には、多くの言語の表現を対照するようなことをしています。例えば、試験を受けることを表すのに、「試験を与える」という言語が結構あります。明かりをつけることや消すことを、「明かりを開く・閉じる」という言語もかなりあります。なぜ、このような言い方をするのかという論文を書きました。また、イギリス英語では、different to のように差異の基準を着点として標示することがありますが、これは通言語的にまれです。これについても論文を書きました。多言語対照以外では、日本語についての論文も書きました。日本語では「～に近い」とも「～から近い」とも言いますが、「～から遠い」は言うのに、「～に遠い」は現代語の慣用ではありません。このことを説明しました。

このように、フランス語学をしていない状態が続いていましたが、『フランス語学の最前線』第4巻の執筆依頼があり、久しぶりにフランス語についての論文を書きました。十数年前に放置してしまった前置詞句外置構文の研究を再開したのですが、長年の間に様々なことが変わっていて、研究を進めていくうちに方法

論などがどんどん変化してしまい、結局、用法基盤モデルに基づく論文になってしまいました。

また、2014年にフランス語学会主催で自由間接話法についてシンポジウムを行いました。本にまとめることになり、近刊予定です。(平塚 徹)

5. 運営・企画担当より

2016年4月例会は発表者が一人だけでした。4月例会の発表者が定数に達しないのは過去5年で3回目のことです。学会ニューズレター第22号(2014年)の「編集後記」で渡邊淳也さん(筑波大学)が次のようにお書きになっています。「例会や研究会で、自発的に発表を希望して下さる方が少ない状況です。[...] 昨今のきびしい競争のなかでもなお自発的な発表希望者が少ないことには、危機感をいだかずにはいられません。研究者としての自己の存亡をかけるわけにはいかないはずの若手(大学院生をふくむ)が、打診をうけてからようやく重い腰をあげるのは、考えてみればおかしなことです。もちろん、だれにでも、そのときどきで直面している困難はあるでしょう。しかし、「よほど余裕のあるときだけ、機会をえらんで舞台上に立つ」という態度では、当人だけでなく、フランス語学界全体の衰退しか展望できなくなります。いまや、謙遜はまったく美德ではありません。」実は、当の渡邊淳也さんを発表者としてカウントしなければ、4月例会の発表者が定数に達しないのは、過去5年で4回目となり、うち発表者ゼロが1回となります。そして、実は、渡邊淳也さんから紹介された発表者をカウントしなければ、…いや、もうやめておきましょう。

どうしてこんなことになるかと言うと、一つには、美德の欠如した会員、と言って悪ければ「謙虚」な会員が多いから、ということがあるでしょう。しかし、原因はそれだけではありません。なぜなら、2016年度は、5月例会以降の発表者は順調に決まっているからです。4月に欠如していた美德が5月以降には回復するというのもおかしな話です。では、毎年4月例会の発表者数が低調なのはなぜか？それはおそらく、2016年になってから2016年の研究(活動)計画を立てはじめ、2017年になってから2017年の研究(活動)計画を立てはじめ、etc.という会員が多いからではないかと思えます。このように考えると、「4月は準備が間に合わなそうだ。それなら9月あたりで」となるのもうなずけます。

しかし、これは特に若手研究者に伝えたいことですが、たとえば2017年の研究(活動)計画を2017年に立てはじめたのでは遅いのです。たとえそれが2017年

元旦であってもです。2017年元旦に「9月例会で発表しよう」と決意したとします。たぶんその決意には「夏休みを使って準備しよう」という決意も含まれるでしょう。そして9月例会一週間前に発表要旨をひととおり書き、発表資料を当日までになんとか仕上げれば、いちおう発表は成立します。ところが、このときの発表と質疑応答に基づいて論文を執筆して投稿し、仮に採択されたとしても、公刊されるのは2018年の半ばです。これだと2017年の論文業績はゼロです。このゼロが響いて、教員公募等に応募できないかもしれません。「論文ゼロ」の年を作るのは研究者にとって自殺行為です。

以上のように簡単にシミュレーションしてみると、2017年の元日の時点ですでに、2017年の研究業績が決まっていることがわかります。研究者にとって「一年後(の自分)」は「未来」ではなく「現在」なのです。どうか、2016年の早い時期から、2017年のご自分の研究業績を思い描きながら、研究(活動)計画を立てていただきたいと思います。そうすれば、2017年4月例会はすぐに定数に達することでしょう。

冒頭に引用したニューズレターで、渡邊淳也さんはこうもおっしゃっています。「ほかの学会では、発表希望者に概要 [=発表要旨] を提出させ、査読でふるい落としているところもあるというのに、われわれの学会では、運営側が発表者の掘り起こしに腐心しているという現状があります。」仮に発表要旨に対して審査が行われるとすると、遅くとも例会発表の3ヶ月前には発表要旨が完成していなければなりません。これは文字通り「完成」でなければならず、「～の問題を扱う予定である」といった不明瞭な要旨はもちろん不採択です。研究発表にとって3ヶ月後は「予定」ではなく「確定」なのです。

もう今年は半分終わってしまいましたが、いまからでも「未来」を「現在」に、「予定」を「確定」に変えることを今年の目標にしてみたいはいかがでしょうか？(酒井 智宏)

6. 例会予定

日本フランス語学会では、毎年4月から12月まで(7月と8月を除く)月一回、原則として土曜日15時から18時に例会を開いています。一回の例会では通常二人の方が研究発表を行います。

例会案内はホームページによる他、メーリングリスト frenchling でも流しています。

例会はフランス語学会の会員以外の方でも、自由に来聴することができます。入場も無料です。みなさまのご参加をお待ちしております。

会場：早稲田大学文学学術院 (戸山キャンパス)

アクセス：

地下鉄東京メトロ 東西線 早稲田駅 徒歩3分

副都心線 西早稲田駅 徒歩12分

JR 山手線/西武新宿線 高田馬場駅 徒歩20分

発表のご希望やその他例会に関するお問い合わせ：

酒井智宏 (例会運営担当 / 早稲田大学文学学術院)

t-sakai@waseda.jp

以下はニューズレター編集段階の4月28日現在の
予定です。最新の予定は学会ホームページで確認して
ください。

第307回例会 2016年6月18日(土) 15:00-18:00

会場：早稲田大学文学学術院 (戸山キャンパス) 33
号館16階第10会議室

(1) 新田 直穂彦 (東北大学大学院)

「副詞句から接続詞句へ: en même temps の場合」

(仮題)

(2) 佐々木 幸太 (関西学院大学非常勤講師)

「mettre の制約に関する一考察」(仮題)

司会: 酒井 智宏 (早稲田大学)

第308回例会 2016年9月24日(土) 15:00-18:00

会場：早稲田大学文学学術院 (戸山キャンパス) 33
号館16階第10会議室

(1) 白石 碧 (パリ第7大学大学院)

「題目未定」

(2) 谷口 永里子 (京都大学大学院)

「題目未定」

司会: 守田 貴弘 (東洋大学)

第309回例会 2016年10月15日(土) 15:00-18:00

会場：早稲田大学文学学術院 (戸山キャンパス)

(1) 谷川 恵 (東京大学大学院)

「題目未定」

(2) 津田 洋子 (京都大学大学院)

「題目未定」

司会: 酒井 智宏 (早稲田大学)

第310回例会 2016年11月12日(土) 15:00-18:00

会場：早稲田大学文学学術院 (戸山キャンパス)

(1) 長沼 剛史 (京都大学大学院)

「題目未定」

(2) 発表者未定

司会: 守田 貴弘 (東洋大学)

第311回例会 2016年12月10日(土) 15:00-18:00

会場：早稲田大学文学学術院 (戸山キャンパス)

(1) 発表者未定

(2) 発表者未定

司会: 酒井 智宏 (早稲田大学)

7. 談話会予定

今年の談話会は「他動性と動詞構文」をテーマに開
催します。(以下の情報は4月現在のものです。最新
の情報は学会ホームページにてご確認ください。)

開催日時：7月23日(土) 15時~18時

会場：早稲田大学文学学術院(戸山キャンパス) 33号
館低層棟6階第11会議室

発表者・発表仮題：

・早津恵美子 (東京外国語大学 日本語学) 「日本語動
詞の構文・意味的な分類の可能性」

・藤縄康弘 (東京外国語大学 ドイツ語学) 「ドイツ語
における他動性と使役・受動」

・藤村逸子 (名古屋大学 フランス語学) 「フランス語
の使役構文と他動性」

多数の方々のご参加をおまちしております。

(秋廣尚恵・須藤佳子)

8. 研究促進プログラム

このニューズレターと、『フランス語学研究』50号
と同時に、学会誌別冊として、第2期研究促進プロ
グラム『パロールの言語学』がみなさまのお手もとにと
どいていることと思います。

以下では、前号でご紹介したものより後の活動をご
報告いたします。

(1) 2015年9月までに、すべてのメンバーが当学
会、または関連する学会、研究会などの場で、各自の
テーマについて口頭発表をおこないました。

(2) 2016年1月31日(土)、大阪大学中之島セン
ターにて、Journée d'étude : « Etude du français
basée sur l'observation des usages réels » と題した
大会を開催しました。つぎのような発表ののち、パネ
ルディスカッション、ならびに来場の方々との討論を
行ないました。

・Itsuko Fujimura (Université de Nagoya)

Caractéristiques de « N1 N2 (épithète) » par
rapport à « N1 de N2 » : Effet domino vs Effet de
serre, Fin janvier vs Fin de janvier

・ Hisae Akihiro (Université des langues étrangères de Tokyo)

Parce que et la cohésion discursive

・ Jun-ya Watanabe (Université de Tsukuba)

Gérondif non-coréférentiel

・ Catherine Schnedecker (Université de Strasbourg)

Je vous le dis très cash : maintenant il faut agir ou comment un adverbe passe de la « banque » à la banlieue et de l'emprunt à la lexicalisation

・ Président : Tomonori OKUBO (Université Kansai)

(3) 一連の研究活動のまとめとして、各自の研究テーマに関する論文の投稿を募集し、論文集を編集・発行しました。2016年11月末日に原稿をしめきり、『フランス語学研究』50号と同様の査読・編集日程を経て、論文集の発行にいたしました。9本をかぞえる掲載論文により、「パロールの言語学」の広汎な研究分野の一端を示すことができたものと思われま

す。
論文集発行をもって、今回のプログラムは終了となりました。このプログラムを遂行するに際しては、多くの方々のご厚情にめぐまれました。研究促進プログラムの開始当初から論文集刊行にいたるまで、多大なご尽力をたまわったメンバーのみなさま、研究会や大会の開催にご協力くださった方々、それらの機会に参加くださったみなさま、そして論文集を手にとってくださいました方々に、こころより感謝を申し添えます。

プログラム世話人：

大久保朝憲 (関西大学)・川島浩一郎 (福岡大学)・
酒井智宏 (早稲田大学)・渡邊淳也 (筑波大学)

9. 各地の研究会だより

◆関西フランス語研究会

関西の大学院生と教員が中心になって研究会を開いていますが、昨年度は、例外的にこの研究会主催で Jean- Jacques Franckel 氏の講演も実現し、その講演内容に基づいた論文が、特別寄稿論文として BELF 50号に掲載されています。

本研究会の会場は原則的には関西大学ですが、都合により大阪なんばにある大阪府立大学のサテライト I-site でもしばしば行いました。昨年度の発表は以下の通りです。

4月11日

小川彩子「Il y a Y qui + V 構文と X avoir Y qui +

V 構文の働き」

佐々木香理「接頭辞 RE の本質的機能 - 認知動詞 retrouver と ressentir の場合 -」

5月16日

森田美里「談話標識としての舌打ち」

7月11日

長沼剛史「指示形容詞句の総称解釈をめぐって」

10月3日

Jean-Jacques Franckel 氏 (講演) « Comprendre, se comprendre, se faire comprendre, vouloir dire »

この研究会では、論文や学会発表をひかえる人がその準備のために発表したり、論文を完成したり学会発表を終えた人がその内容を紹介したりしています。形式にこだわらず、気軽に意見・情報の交換ができる集まりです。また、新刊書や論文の紹介、国内外の新しい研究の動向についての紹介や解説なども歓迎します。

平塚徹：

hiratuka@cc.kyoto-su.ac.jp

大久保朝憲：

tomonori@ipcku.kansai-u.ac.jp

(大久保朝憲)

◆東京フランス語学研究会

東京フランス語学研究会は、大学院生など、若手を中心としたフランス語学研究者の気楽な研究発表、議論、交流の場です。多くのかたがたに参会していただきやすいよう、フランス語学会の例会がひらかれる日に、同じ(または近接した)会場で、原則として13時から14時30分まで開催します。フランス語学会例会の会場が変更されるときや、編集委員会などと重なるときは開催せず、年間6回程度の実施を目安とします。

会員資格、発表資格、会費などの制度は設けませんので、関心のあるかたはどなたでも自由に参会、発表していただけます。発表は、フランス語(学)に関係することであれば、どのようなテーマでもかまいません。また、完成された内容である必要もありません。学会発表の前段階にあたるような習作的な発表や、先行研究に対する論評といった形の発表も歓迎します。

昨年度ニューズレター掲載分以降、今年度4月までは、以下のような内容で研究会が開催されました。

第22回研究会 2015年9月26日(土)
発表者: 古賀健太郎(東京外国語大学大学院)
題目: Code de la route spécial vélo, visites guidées spécial Nouvel an chinois à Paris...
2つの名詞を結ぶ spécial から見る, 語形成上のコネクターに関する考察

第23回研究会 2015年10月17日(土)
発表者: 津田香織(筑波大学大学院)
題目: 日本語の動詞テイル形とフランス語の対応表現

第24回研究会 2015年11月7日(土)
発表者: 田代雅幸(筑波大学大学院)
題目: 談話マーカ- en revanche をめぐって

第25回研究会 2016年4月23日(土)
発表者: 渡邊 淳也(筑波大学)
題目: En passant の文文化・語用論化について

4月28日現在, 今後の研究会の予定は, つぎのようになっています。

第26回研究会
日時: 2016年5月14日(土) 13時から14時30分
会場: 早稲田大学文学学術院(戸山キャンパス) 33号館16階第10会議室
発表者: 水落 理子(筑波大学大学院)
題目: 未定

第27回研究会
日時: 2016年6月18日(土) 13時から14時30分
会場: 早稲田大学文学学術院(戸山キャンパス) 33号館16階第10会議室
発表者: 佐藤 千秋(東京外国語大学大学院)
題目: 未定

第28回研究会
日時: 2016年9月24日(土) 13時から14時30分
会場: 早稲田大学文学学術院(戸山キャンパス)
発表者: 関 敦彦(東京外国語大学大学院)
題目: 未定

第29回研究会
日時: 2016年10月15日(土) 13時から14時30分
会場: 早稲田大学文学学術院(戸山キャンパス)
発表者: 近藤 野里(名古屋外国語大学)

題目: ケベック・フランス語の発音の特徴(仮題)
第30回研究会
日時: 2016年11月12日(土) 13時から14時30分
会場: 早稲田大学文学学術院(戸山キャンパス)
発表者: 隈元 舞(東京大学大学院)
題目: 未定

発表を希望なさるかたは, 下記ホームページの「お問い合わせ」の項目から世話人あてにご連絡ください。最新の予定については, ホームページの「今年度の研究会」の項目でご確認ください。

東京フランス語学研究会ホームページ:

<http://lftky.jimdo.com/>

(渡邊淳也・塩田明子)

10. 海外情報

今回はパリ第3大学に留学中の古賀さんと, カナダのラヴァル大学で学位をとられた松川さんに, それぞれの大学での情報を紹介していただきます。

◆パリ第3大学(Université de Paris 3)

私は2014年10月よりパリ第3大学の博士課程に留学しています。話しことばの統語研究がご専門のJeanne-Marie Debaisieux教授の下, 「フランス語話しことばにおける『範列的リスト(liste paradigmaticque)』の統語的分析」というテーマで研究に取り組んでいます。同時に, 私がこれまで東京外国語大学で行ってきた複合語形成についての博士論文の準備も進めています。語形成の専門家の下で留学するという選択肢もあったのですが, 統語論のよりコアな部分にも興味があったこと, また, 東京外国語大学の話しことばコーパスプロジェクトへの参加を通じて, 話しことば研究の面白さを知ったことから, このような選択をすることになりました。当初は関連性のないように見えたこの2つのテーマでしたが, 研究を進めるうちに両者の間に共通する要素を見出すことができ, 興味深く感じているところです。

留学先ではパリ第3大学のÉcole doctorale (ED) « Langage et Langues » と LaTTiCe (Langues, Textes, Traitements informatiques, Cognition) に所属しています。後者はCNRS, ENSおよびパリ第3大学の3者にまたがっているラボで, コーパスに基づく古仏語研究から, 英仏語などにおけるエビデンスリサーチ研究, 自動言語処理に至るまで, メンバーの研究分野は多様です。月に1回のゼミのほか, 毎年1回ラボに所属する博士課程の学生の発表会もあり,

私も昨年発表をさせていただきました。また ED の方でも音声学や談話の情報構造、少数言語のフィールドワークなど、さまざまな分野のゼミが開講されています。

昨年 11 月には、トゥールーズ大学で開かれた『談話における列挙』に関する国際研究会で発表する機会をいただきました。範列的リストを統語的観点から分析することの意義とその限界について、多くの指摘と助言をいただくことができたほか、関連する研究発表を聴くこともでき、非常に有意義な機会でした。

指導教官の Debaisieux 教授は国際プロジェクト Orfeo の代表を務めています。これは CRFP, TCOF など既存の 12 のフランス語コーパスの情報 (メタデータ・転写・アノテーション等) を統一し、1 つのプラットフォームからアクセスできるようにするプロジェクトで、2017 年初めの完成を目指して作業が進んでいます。東京外国語大学のフランス語話しことばコーパスもこの中に組み込まれることになっています。このプラットフォームはオープンアクセスとなる予定で、完成するとコーパスを利用した調査・研究が今までよりも格段に容易になることが期待されます。詳細はプロジェクトのウェブページ (<http://www.projet-orfeo.fr>) をご参照いただければと思います。

(古賀健太郎)

◆ラヴァル大学 (Université Laval)

私は 2008 年 9 月から 2015 年 4 月まで、ケベック・シティーにあるラヴァル大学大学院博士課程に在籍していました。この大学は北米で初めて創立されたフランス語の大学であり、フランス語学の分野では、Fonds Gustave Guillaume という機関がギュスターブ・ギョームの講義録 (*Leçons de linguistique de Gustave Guillaume*) を出版したことで知られています。ケベックにおけるフランス語は、特に音声や語彙使用の面でフランスのフランス語とは多くの違いが見られます。そのためラヴァル大学では、ケベック・フランス語の音声や語彙論・辞書編集の研究が行われています。音声の研究に関しては Laboratoire de Phonétique et Phonologie de l'Université Laval à Québec, 語彙論・辞書編集に関しては Laboratoire de lexicologie et lexicographie québécoises (LEXIQUE) といった研究室があります。

私はこの大学の言語学研究所に所属しましたが、専攻は言語教育学 (フランス語) でした。その中で私は特に第二言語語彙習得・学習を博士論文の研究テーマにし、Zita De Koninck 先生の指導を受けました。彼女は、ケベックに移民した子供のためのフランス語教

育 (フランシザシオン) の専門家で、語彙の習得・学習・教育にも精通しています。

語彙習得・学習に関する文献を読み込んでいくうちに、私は語彙連想の研究に興味を持つようになりました。この分野では、学習者やネイティブスピーカーに語彙連想テストを課し、刺激語からどのような連想をするかを分析します。ですが私は、パラディグマティック連想とシンタグマティック連想の対立という語彙連想研究の枠組みや、その研究成果を第二言語語彙学習に応用することを博士論文の研究目的にしました。2011 年～2012 年はデータ採取のため日本で過ごし、ケベックに戻った後は指導教授と週 1、2 回の面談を重ねながら、博士論文の執筆にとりかかりました。

その間、カナダ国内の様々な学会で、研究発表をする機会がありました。例えば、ラヴァル大学では毎年 3 月の初めに、Journées de linguistique と呼ばれる学生のみが発表できる学会があり、カナダ国内外から学生が研究発表をしに来ます。モントリオールでは、毎年 4 月の終わりに Association québécoise des enseignants de français langue seconde がフランス語教員向けの大きな学会を開催し、そして毎年 5 月末にはカナダ国内のどこかで Association Canadienne de linguistique appliquée の学会があります。

ケベックの大学院教育の大きな特徴は学生と指導教授の距離が近いということにあると思います。手厚い論文指導だけでなく、研究発表の指導もしてもらいました。学会発表が近づくと De Koninck 先生は大学の教室を貸し切り、他の学生や先生を呼び、リハーサルをしてくれました。それだけでなく、彼女の大学院のゼミやフランシザシオンの教員養成プロジェクトでアシスタントとして働く機会をいただけたのはとても貴重な経験でした。

2014 年 11 月に博士論文を提出し、翌年 4 月に論文の審査を受けました。その後帰国し、現在は非常勤講師としてフランス語を教えつつ、自分がケベックで積み上げてきた語彙習得・学習の研究を日本のフランス語教育現場で生かすべく、日々奮闘しています。

(松川雄哉)

11. メーリングリスト frenchling からのお知らせ

frenchling はフランス語学関係の情報交換を目的としたメーリングリストです。フランス語学関係の研究会や講演会といった催事の告知、文献の探索、あるいはフランス語そのものについての質問、疑問、そして議論に活用してください。利用にあたっては以下の注意をお守りください。当メーリングリストはフランス語学会と密接な関係にありますが、当学会専用の

メーリングリストではありません。フランス語学会を含め、特定の学会員だけを対象とした連絡には使用しないでください。逆に学会員以外にも開かれたオープンな会合や呼びかけにはどんどん利用してください。ただし、特定の政治的メッセージを含むもの、営利的な活動、アルバイト募集等の研究・教育と関係のないアナウンスなどはご遠慮ください。なお、フランス語関係の教員の募集に関する情報は流していただいて問題ありません。設立当初はフランス語に関する議論がこのメーリングリストで盛んに行われたのですが、最近はそういうことも少なくなったのが残念です。フランス語の研究や教育に従事している我々は、フランス語に関して日々新しい発見や疑問を持つことも多いかと思いますが、そのような発見や疑問を共有するためにもこのメーリングリストを利用していただければと思います。学生さんたちも含め、皆さんがもっと気軽に利用してくだされば我々としても管理のしがいがあります。

現在、frenchlingはGoogleグループサービスを利用して運営しています。frenchlingのアドレスはg-frenchling@googlegroups.comです。新規の登録、アドレス変更、あるいは退会の場合は直接、以下の管理グループのアドレスまでご連絡ください。メンバー以外の方に登録を勧められる場合も、管理グループのアドレスをお伝えください。

管理グループアドレス：

g-frenchlingowners@googlegroups.com

それではg-frenchlingをどうかご活用ください。

(frenchling 管理グループ)

ニューズレター印刷代金	18,252
発送費・通信費	76,091
特別発表（講演）謝礼	150,000
会場費	0
事務消耗品費	12,226
振込手数料	18,448
ホームページ管理費	5,466
言語系学会連合会費	10,000

小計	1,047,688
次年度繰越金	3,509,351
計	4,557,039

次年度繰越金の内訳は以下のとおり

銀行預金（三井住友銀行普通預金）	862,540
（三井住友銀行定期預金）	2,007,436
郵便貯金（普通）	288,856
（振替）	297,096
現金	53,423

計 3,509,351

(*) 2016年3月31日現在の収支決算報告。5月に開催される編集委員会で会計報告と監査報告がなされ、審議のうえ承認の手続きがとられる。

〒 162-8644

東京都新宿区戸山 1-24-1

早稲田大学文学学術院 酒井智宏研究室内

日本フランス語学会

12. 2015年度収支決算報告 (*)

(単位 円)

収入の部

会費	684,000
機関誌売上金	96,200
広告収入	108,000
預金利息	1,185
学会経費補助 (早稲田大学)	50,000

小計 939,385

前年度繰越金 3,617,654

計 4,557,039

支出の部

BELF49号印刷代金	617,205
BELF50号編集実費	140,000

13. 編集後記

『フランス語学研究』は、今年度で50号というめでたい節目をむかえました。また、別冊論文集『パロールの言語学』も刊行できました。『フランス語学研究』が創刊された1967年は、たまたまわたしの生まれた年でもありますので、勝手にただならぬ縁を感じております。しかし、この歳になると、わたしより若い世代で研究プロジェクトを提唱してくださる方がいてもよいのではないかと思います。第2期研究促進プログラムは終了しましたので、次期はもっと新しい世代の方々が主導してくださると理想的ではないでしょうか。といっても、もちろん、「自分はもう引っこめたい」という意味ではありませんが。(渡邊淳也)

♪ ニューズレターのバックナンバーは、日本フランス語学会のホームページで読むことができます。

<http://www.sjlf.org/>